

汽水域研究会 NEWS LETTER

新会長ご挨拶

入月俊明汽水域研究会新会長より就任のご挨拶

この度、三瓶良和前会長のあとを引き継ぎまして、2022（令和4）年1月1日より汽水域研究会の会長を務めさせていただくことになりました入月俊明です。私は島根大学学術研究院環境システム科学系に所属しておりまして、総合理工学部地球科学科の学生さんの教育・研究に携わっています。専門分野は層位・古生物学で、汽水域関係では、主に小型底生動物の一つである甲殻類貝形虫綱（Ostracoda、カイミジンコ）の群集解析や殻の微量元素分析に基づいて、完新世の古環境を復元する研究を行ってきました。貝形虫類は二枚貝のような石灰質の殻を持っており、これが堆積物中に長期間保存され、“微化石”として多産します。古生代オルドビス紀から現在まであらゆる水域で繁栄し、ウミホタルもその仲間です。

さて、汽水域研究会の目的は、全国の陸水や内湾を含めた汽水域を調査・研究している方々や組織を幅広く結集し、学際的な研究領域である「汽水域研究」を発展させ、汽水域の環境保全・修復、持続的な利用などについて検討・提言を行い、社会貢献することです。汽水域は地球温暖化などの気候変動や人間活動の影響を強く受ける場所であり、持続可能な開発目標（SDGs）の観点から、ますます最新の研究成果の公表や地域への還元が重要になっています。そこで、このような汽水域を対象に研究を行っている研究者のネットワーク強化のために、今まで以上に会員を増やし、研究会を発展させる努力を続けていきたいと思っております。また、汽水域研究会が出版する査読誌であるLagunaについては、学術雑誌としての認知度や引用率を高めるための改革を行なっていきたいと思っております。さらに、汽水域研究会は研究を推進する人材を育成するという使命を持ち合わせておりますので、学部の学生さん、大学院生さん、若手研究者の多くの発表が引き続き汽水域研究会で行われることを願っております。

最後に、汽水域研究会の取組に、御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。就任の御挨拶といたします。



入月俊明新会長



フィールド調査のようす

(汽水域研究会会長)

新役員（2022年1月1日～2023年12月31日） 役員一同、研究会の発展のために一生懸命務めて参ります。

会長	入月 俊明	(島根大学)	副会長	山口 啓子	(島根大学)
事務局長	瀬戸 浩二	(島根大学)	編集幹事	作野 裕司	(広島大学)
企画幹事	倉田 健悟	(島根大学)	大会幹事	金 相暉	(島根大学)
情報幹事	山田 和芳	(早稲田大学)	監査	召古 裕士	(NPO法人日本エコビレッジ研究会)

汽水域研究会第14回大会（第10回例会）

汽水域研究会の第14回大会（第10回例会）と、島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センターの第29回汽水域研究発表会との合同研究発表会が、2022年1月8日（土）から9日（日）にかけての2日間にわたって開催されました。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、研究会として初めて現地会場とオンラインを併用したハイブリッド形式開催となりました。

参加者は延べ184名（1日目：106名、2日目：78名）でした。研究発表は常設セッションである「汽水域一般」7題、「流動解析」2題、「水圏生態研究」11題、「環境変動解析」5題、スペシャルセッション「完新世における汽水域およびその周辺域の環境変遷史」12題、招待講演2題、特別講演1題の計40題でした。汽水域というキーワードでつながる学際的な研究成果が報告されました。本大会ではとくに、学部生や大学院生による若手研究者による優秀な発表も数多く、汽水域研究を担う次世代育成という観点においても有意義な機会となりました。

その中で、招待講演として講演いただいた関西学院大学の谷水雅治博士による「微量元素同位体指標を用いた沿岸海域での物質循環評価の試み」、島根大学の林昌平博士による「宍道湖のジェオスミン生産者の同定と同種ジェオスミン非生産株の分離」では、汽水域研究に関連する新しい動向や視点についての紹介があり、参加者らと積極的な意見交換が行われました。特別講演として講演いただいた早稲田大学の山田和芳博士による「ASGM（零細および小規模金採掘）に関連した環境汚染研究における湖沼掘削科学の貢献」では、積年の汽水域研究によって系統化された研究スタイルが他分野研究にも応用されて、新知見が得られていることが報告されました。

初のハイブリッド開催ということで混乱も予想されましたが、進行が滞るような事態は起こらずに、予定通り進行することができました。質疑応答は口頭による質問とチャットの2つを並行して行われましたが、チャットによる質問は、質疑応答時間終了後にも個別にやり取りが可能な為、より議論を深めることが可能になったと感じました。

研究発表会終了時には、新しく汽水域研究会会長に就任した入月会長が閉会の挨拶を述べられ、初のハイブリッド開催の運営や発表への謝辞が述べられました。

参加者の方、運営の方々、ご参加ありがとうございました。これからも汽水域研究会と島根大学エスチュアリー研究センターをよろしくお願いいたします。



現地会場発表の風景（講演者：川井田俊博士）
スクリーンに投影される発表者PC（スライド）の画面がリアルタイムオンラインでもつながっている



オンライン発表の様子（講演者：山田和芳博士）
発表者のスライドやカメラ画像が現地会場のスクリーンにも投影される

(P2-3 汽水域研究会大会幹事、事務局長)

学生賞報告

汽水域研究会第14回大会（第10回例会）学生賞授与

汽水域研究会では優秀な若手人材の育成と学生の研究意欲向上を目的として、「汽水域研究会会長賞」と「エスチュアリー研究センター長賞」を優秀な発表を行った学生に授与しています。第14回大会（第10回例会）においては参加者による投票が行われ、以下のとおり受賞者が決定しました。2022年2月1日にエスチュアリー研究センター長室にて授与式を行いました。入月会長からは全員に対して温かい言葉で祝賀と激励を行いました。

今回「汽水域研究会会長賞」を受賞したのは、島根大学大学院総合理工学研究科の佐々木聡史さん、鳥取大学大学院連合農学研究科の松田烈至さんの2名、「エスチュアリー研究センター長賞」を受賞したのは島根大学大学院自然科学研究科の福山真菜さん、島根大学大学院自然科学研究科の中村和磨さんの2名でした。受賞されたみなさま、おめでとうございます！

汽水域研究会会長賞

佐々木聡史さん

島根大学大学院 総合理工学研究科

「東南極すりばち池付近の中部完新統産貝形虫化石群集と古環境」

（佐々木聡史・入月俊明・瀬戸浩二・菅沼悠介）

得点：21.6点

「お世話になった皆さんありがとうございました。今後の場所でも研究を続け、いつか論文を発表したいと思います」



エスチュアリー研究センター長賞

福山真菜さん

島根大学大学院 自然科学研究科

「央道湖・中海におけるイサザアミ属2種（アミ目アミ科）の分布と繁殖戦略」

（福山真菜・仲村康秀・川井田俊・山口啓子）

得点：22.5点

「やることはまだまだあります。卒業はしますが、何かしらイサザアミ類に関する研究に関わってみたいです」



松田烈至さん

鳥取大学大学院 連合農学研究科

「汽水性二枚貝ヤマトシジミの成長段階並びに生息地の違いによるアンモニア耐性」

（松田烈至・山口啓子・園田 武）

得点：20.2点

「この賞を励みにして、頂いたご意見を参考に論文投稿を頑張ります」



中村和磨さん

島根大学大学院 自然科学研究科

「斐伊川水系汽水域におけるヨシエビの漁獲量変動と気象条件」

（中村和磨・石山侑樹・山口啓子・中村幹雄・松本洋典）

得点：20.3点

「この賞を励みとしてヨシエビの加温養殖の実現に努めます」



※学生賞対象発表者の平均点は18.90/25点満点でした。



全員で記念撮影（左から齋藤エスチュアリー研究センター長、福山さん、中村さん、松田さん、佐々木さん、入月会長）

汽水域研究会第13回大会（オンライン）

汽水域研究会第13回オンライン大会が2021年12月18日（土）に開催されました。新型コロナウイルス感染症拡大防止に歯止めがかからず、有明海（佐賀）における現地開催を断念して、急遽オンライン形式での代替開催となりました。本大会は学生中心に16題の講演が行われました。講演終了後、総会が開かれました。

（汽水域研究会大会幹事、事務局長）

コラム

しじみの来し方行く末

新型コロナウイルス感染拡大第6波の大波が来る前の2021年秋、調査研究のため約10年ぶりに秋田県八郎潟と青森県小川原湖を訪れた。

琵琶湖に次ぐ全国で2番目の広さをもった八郎潟の干拓工事が終わったのは、最初の東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年のことであった。その3年前の1961年に防潮水門が造成され、豊かな汽水域は無機質な淡水域に一変した。このことは多くの方が知っている事実かと思う。汽水域のシンボルのひとつであるしじみを例にとると、干拓前は1,700トンあまり漁獲されたのが、水門閉塞後は徐々に減り続け1988年には47トンにまで落ち込んだ。しかし、1990年には10,750トンまで一時的に増えたという驚くべき記録が残っている。これは1987年8月末から9月頭にかけて、台風の影響により、水門から海水が入ったことが原因とされる。当時、しじみ漁をするため、青森県十三湖や小川原湖の漁師も多数出稼ぎにいったほどであったようだ。でも、この豊漁は5年しか続かなかった。まさにしじみの一生と合わせるかのように、元に戻っていった。



現在の八郎潟調整池 遠くに干拓地を望む
2021年11月撮影

そして、今、しじみの主要な産地のひとつである青森県で異変が起きているようだ。「しじみの稚貝が夏を越せずほとんど死んでしまった」と、友人の漁協関係者が教えてくれた。原因がわからないことも悩みを深くしている。新型コロナウイルス感染拡大によって輸入しじみの流通量が少ないこともあって、国内産しじみはここ数年高値で取引されている。漁師にとっては好都合の状況がつづく。今のところは問題ないが、友人曰く「2-3年後がとても心配」と。かつて八郎潟でおきた一時の打ち上げ花火後の悲劇が青森で繰り返されないことを願うばかりだ。

（汽水域研究会情報幹事）

会員数（2022年3月31日）

正会員：78名（-3）、賛助会員：5名（±0）、
学生会員：41名（±0）、計：124名
#カッコ内は2021年11月1日からの増減を示す

編集後記

第23号はハイブリッド形式で開催した第14回大会を中心に編集しました。新体制でのぞむこれからの汽水域研究会にご期待ください（山）